

中学校国語科教科書・漢文教材のデフォルト

大橋 敦夫

はじめに

中学校国語科教科書(平成二七(二〇一五)年度版)に収録されている漢文教材を分析する。

まず、五社の教材を比較対照し、定番教材を明らかにする。続いて、これまでの教材批判がどの程度克服されているか検証し、現場での教授法の工夫について提言したい。

一、漢文教材の比較

(一) 教材の配列
今回比較対照する五社(①)の教材配列は、次のようになってい

| | | | |
|------|------|----------|----------|
| 出版社 | 一年 | 二年 | 三年 |
| 光村図書 | 故事成語 | 漢詩 | 文章(『論語』) |
| 学校図書 | 故事成語 | 文章(『論語』) | 漢詩 |
| 教育出版 | 故事成語 | 文章(『論語』) | 漢詩 |
| 東京書籍 | 故事成語 | 漢詩 | 文章(『論語』) |
| 三省堂 | 故事成語 | 漢詩 | 文章(『論語』) |

一年次の故事成語は、全社共通である。二・三年次の教材は、漢詩・文章(『論語』)の順にするか、文章(『論語』)・漢詩の順にするかで、各社に違いがある。

(二) 二年次以降の転校転入に際し、教科書が変わる場合は、この配列について考慮し、教員は既習内容を確認する必要がある。

(二) 故事成語の定番教材

各社が挙げている故事成語は、次のとおりである。

光村図書……矛盾・推敲・蛇足・四面楚歌・漁夫の利

学校図書……五十歩百歩・矛盾・助長・漁夫の利・出藍の

誉・蛇足・断腸の思い

教育出版……矛盾・大器晚成・有備無憂・借虎威狐

東京書籍……矛盾・推敲・五十歩百歩・背水の陣・蛇足

三省堂……矛盾

「矛盾」は、全社共通で、本文で詳しく取り上げている。他は、

二社に共通する語が四例(「推敲」「蛇足」「漁夫の利」「五十歩百歩」)

である。教育出版は、語例が他社と傾向の違うものを示している。

取り上げる例数は、五例前後が標準的である。三省堂のみ一例

と少ないが、入門期を考慮して配置される「漢文の読み方」につい

ての解説が二頁あり、他社の倍の分量である。

ちなみに、中学生用の国語便覧には、以下の故事成語が挙げら

れている。

漁夫の利・五十歩百歩・守株(株を守る)・一炊の夢・臥薪嘗

胆・鼎の軽重を問う・画竜点睛・杞憂・牛耳を執る・玉石混

交・螢雪の功・逆鱗に触れる・捲土重来・呉越同舟・五里霧

中・蛇足・矛盾・塞翁が馬・助長・切磋琢磨・推敲・他山の

石・大器晚成・四面楚歌・朝三暮四・登竜門・虎の威を借る

狐・羊頭を懸けて狗肉を売る・背水の陣・船に刻みて剣を求

む・竜頭蛇尾(『国語便覧 増補版』浜島書店 二〇一四・三)

補助教材として、国語便覧を使用するかしないかで、習得する

例数に差が生じることが予想される。

(三) 漢詩の定番教材

各社の漢詩教材は、次のとおりである。

光村図書……「春晓」(孟浩然)

「絶句」(杜甫)

「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」(李白)

学校図書……「春望」(杜甫)

「元二の安西に使ひするを送る」(王维)

「静夜の思ひ」(李白)

教育出版……「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」(李白)

「春晓」(孟浩然)

「春望」(杜甫)

東京書籍……「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」(李白)

「春望」(杜甫)

三省堂……「春晓」(孟浩然)

「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」(李白)

「春望」(杜甫)

平均して三編ほどの作品を載せる。そのうち、四社に共通するものが二例(「黄鶴楼」「春望」)、三社に共通するものが一例(「春晓」)あり、作品の共通性が高い。

詩の形式等については、各社の個性が出ている。学校図書は、絶句・律詩、また対句・押韻についても、全く触れない。他の四社は、絶句・律詩、対句についての解説がある。押韻については、教育出版・三省堂が取り上げているが、基礎的な解説にとどまる(2)。押韻は、中国語の音韻に関する基本的な知識がないと、きちんとした理解は期待できない。扱いが各社で足並みが揃わないのは、致し方ないだろう。「平仄が合う」という慣用句が、実感を伴わないものになっている現代を反映するかのようである。

(四) 文章『論語』の定番教材

全社共通して文章教材は、『論語』から素材を選んでいる。以前

(平成時代の前半)は、『論語』以外の、『桃花源記』(教育出版)や『戦国策』(孔子家語)(三省堂)などを載せていたが、今は『論語』オンリーになっている。具体的な章句は次のとおりである。

光村図書……子曰「学而時習之」(学而)◎

子曰「温故而知新」(為政)◇

子曰「学而不思則罔」(為政)○

子曰「知之者」(雍也)

学校図書……子曰「吾十有五而」(為政)□

子曰「学而不思則罔」(為政)○

子曰「由誨女知之乎」(為政)

子貢問曰「有一言而」(衛霊公)△

教育出版……子曰「学而時習之」(学而)◎

子曰「知之為」(為政)

子曰「己所不欲」(顔淵)▽

東京書籍……子曰「巧言令色」(学而)

子曰「君子和而不同」(子路)

子曰「学而不思則罔」(為政)○

子曰「過而不改」(衛霊公)

子貢問曰「有一言而」(衛霊公)△

三省堂……子曰「吾十有五而一(為政)」□

書房

子曰「温故而知新」(為政)◇

*『故事成句でたどる楽しい中国史』井波律子

子曰「己所不欲」(衛靈公)▽

岩波書店

子曰「学而時習之」(学而)◎

『漢文の読みかた』奥平 卓 岩波書店
『論語』加地伸行 講談社

全社共通のものはないが、三社共通の教材が二例(◎・○)、

『論語物語』下村湖人 河出書房新社

二社共通の教材が四例(◇・□・△・▽)あり、これも共通性が比

『現代人の論語』呉 智英 筑摩書房

較的高いと言える。

*『漢詩入門』一海知義 岩波書店

(五) 定番の推薦図書

教材本文の後に掲げられている関連の推薦図書は、次のような

東京書籍…… 掲出なし

書目である(3)。

三省堂……『四字熟語集』奥平 卓・和田武司 岩波書店

光村図書……『故事成語 目からウロコの85話』阿辻哲次

岩波書店

青春出版社

*『漢詩入門』一海知義 岩波書店

『孔子はこう考えた』山田忠生 筑摩書房

『漢詩の絵本』加藤 徹 ナツメ社

『老子・莊子』野村茂夫 角川書店

『漢詩への招待』石川忠久 文藝春秋

学校図書……『孔子——覚醒の喜び』井上靖 新潮社

『漢文を学ぶ』栗田 亘 童話屋

『論語新釈』宇野哲人 講談社

『こども論語塾』安岡定子・田部井文雄(監修)

教育出版……『ここから生まれた故事成語』堀江忠道 京都

ポプラ社

右はまた、図書室での書籍準備に資するリストとも言えようか。

*は、二社共通でもあり、定番と言ってよい書目であろう。

二、漢文教材の問題点の克服

戦後漢文教育実践史において、平成年代の漢文教育の特色は、渡邊(二〇二〇(4))によって、次のように指摘されている。

国際化を背景として、漢文は我が国の伝統的な言語文化として位置づけられ、言語活動主義の基に言語能力の育成と言語文化の理解に資する漢文教育の追究。

この平成時代の前半にあつて、中学校国語科教科書における漢文教材の問題点を指摘した小金澤(一九九四(5))は、次の三点を挙げています。

① 漢文入門のための文章の欠如

② 漢文の欠如

③ 参考地図・年表類の欠如

この「欠如」は、その後克服されているのか。本稿で取り上げた平成時代後半の教科書で検証してみる。

① について小金澤は、古文教材の方に比重がかかり、漢文への導入が不十分であることを指摘していた。一年次の教材配列を見

ると、全社とも故事成語から学びに入る点は変化がない。

故事成語の解説においては、歴史的に中国古典との深い関わりがあることにふれられており、各社とも導入のニュアンスは、出ている。

特に小金澤が問題視していたのは、書き下し文のみで、漢文が無い場合があることであつた②。各社とも触れる「漢文の読み方(訓読の方法)」において、漢文は登場するが、小金澤の危惧する漢文の欠如(小金澤は一定量の例示を求めていると考えられる)とともに、あまり改善されていないと言える。

③の参考地図・年表類の欠如も改善されてはいない。すべてを教科書一冊に盛り込むことには限界もあり、中学校段階から、国語便覧の積極的活用を図る方が現実的と思われる。

三、漢文指導の工夫

教科書教材をじっくり学び、基本的な訓法を身に付けたら、実際にいろいろな漢文を読める面白さを実感させたい。具体的には次のような学習活動が想定できる。

① 地域の石碑などの漢詩文を読んでみる。

② 郷土の漢学者の詩文を読んでみる。

③ 資料館や学校に残る古い教科書(旧制中学の漢文教科書)

を読んでみる。

④漢字文化圏(中国+朝鮮半島・ベトナム)の作品を視野に入れて読んでみる。

①・②・③は、総合的な学習に、④は国際理解教育に展開できるテーマ設定が可能である。

おわりに——今後の課題——

現代教育界のキーワードの一つである「連携」を軸に、具体例を挙げてみる。

小中の連携という点では、小学校段階で「漢字嫌い」を発生させない学習活動を期待したい。漢字学習を語彙学習に転換することも、その工夫の一つと考えられ、拙案を提示したことがある(6)。

小学校では、国語辞書に付箋をはる辞書引き学習が盛んであるが、漢和辞書を対象にした学習活動も、いろいろな工夫していきたい。たとえば、「赤」と「紅」、あるいは「川」と「河」と「江」などをどう使い分けるのか。また、同訓異字の使い分け(「はか(函・測・計・量・諮・謀)る」など)等の課題設定も工夫したい。

中高連携では、注釈が様々に展開するおもしろさを、本文関連の部分の抄物(『論語抄』等)や漢籍国字解などを教材化することで実践してみたい。

【注】

1 各教科書の書名(平成二七年発行)は、次のとおりである。

光村図書『国語』1・2・3

学校図書『中学校 国語』1・2・3

教育出版『伝え合う言葉 中学国語』1・2・3

東京書籍『新編 新しい国語』1・2・3

三省堂『現代の国語』1・2・3

2 たとえば、教育出版の解説は次のようなものである。

『春望』の偶数句末には、「深(シン)・心(シン)・金(キン)・簪(シン)」のように、同じ響きの音(韻)をもつ字が用いられています。これを「韻を踏む」または「押韻する」といい、漢詩の響きを美しくする効果があります。七言詩では、さらに第一句末も韻を踏みます(『伝え合う言葉 中学国語』

3 119頁)。

3 学校図書を除き、出版社は明記されていないが、私に補って掲げた。

4 渡邊春美「戦後の実践史から見た漢文教育の現状と展望」

『新しい漢字漢文教育』第七〇号 全国漢文教育学会

二〇二〇・六

- 5 小金澤豊「中学校国語教科書における漢文教材のあり方」『新しい漢文教育』第一九号 全国漢文教育学会 一九九四・二〇
- 6 大橋敦夫「国語科学習の発展課題——国語学分野について——」『上田女子短期大学紀要』第四二号 二〇一九・一

【参考文献】

加藤 徹『漢文の素養 誰が日本文化をつくったのか?』光文社
二〇〇六・二

〔付記〕本稿執筆中に、令和三年度版の中学校国語教科書（令和二年二月発行）が公になった。本稿の視点での追跡調査も今後の課題としたい。